

「ござるか」と云う。俺が、「あすひとは翌檜と書き、明日、檜になろうという木で、あすなろとも称び、また檜葉ともいう。外目は檜に似ているが、中味は全く異う。これをわかり易く人間に譬えれば、外装だけに格好いい意匠を凝らし、中味は犬も斬れぬような錆び刀をさげて、無精髻など生やした大ざむらいのようなもので」と云い終らぬうちに、藤四郎はムカツとなって座に刀を取りに立ち上った。

李下の冠

羽織袴で端し近に坐っていた主人の代官が、これを取り静めようと袴の股立ちを取って立ち上ったが、その時すでに、娘の美代が宥めていた。腕まくりをして藤四郎は強がりを見せたが、結局、事なくて済んだ。

立った主人は、暫く所在なさそうな面持ちだったが、心をとおり直したふうには、こんな挨拶をした。

「今夕は兵頭殿以下多数の御臨席を賜わり、身に余る光栄と存じます。お恥かしきおもてなしにて、ご無札の段幾重にもお詫び申し上げますが、最初の煎茶茶碗は当家先代が尾張義直侯から拝領の唐物・天啓の古染付。次にお手許の酒盃は高麗、李朝など色々でございますが、兵頭殿のお手持ちは雲鶴青磁。これらの酒盃は床の懸物と共に文祿の折に加藤清正公が朝鮮から招来したものと伝えられます家伝にございます。軸の詩は唐の韓退之、書は明の文徵明でございます。酒肴の

至らぬところをこれらにて補いを願ひ上げ、何卒ごゆるりとお寛ろぎ下さいませ。

さて、新築の材は木挽五郎七の宰領で、檜と申す上材は一本も使用致しておりませず、御覧のようにあすひ以下の下材にて仕上げましたるもの。美林に囲まれたる代官屋敷が甚だお粗末で、お見苦しいかと存じまするが、これも李下の冠の一興と御ろうじ、お目こぼしの程を心から願ひ上げまする」。主人の挨拶が終ると、客を代表して兵頭が祝辞を述べ、そのくりに、主人に向つて、韓退之の詩を読めという。代官は少しく胸を反らして、「木曾川筋の者は大工や木挽の職人でさえ、この程度のもは読みこなせませす」と云つて、俺にその詩を読んでみると云うのである。

馬の耳に念仏

一文徵明の書はわりあいに読み易い。俺はこれまでに一、二拝見したことがある。韓退之のこの詩は太平記にも引用されているほど我が国人に親しまれている、と親方からかねて教わっていた。

一封朝に奏す九重の天

夕に潮州に貶せらる路八千

聖明の為に弊事を除かんと欲す

肯て衰朽を將つて残年を惜しまんや

雲は秦嶺に横たわつて家何くにか在る

雪は藍関を擁して馬前まで

知んぬ汝が遠く来たる応に意あるべし

好し吾が骨を瘴江の辺に取めよ

代官はこの詩について、「韓退之が時の皇帝・唐の憲宗に対して、諫めの書を奉り、皇帝の怒りにあい、瘴癘の地・潮州に流された時の詩である。この時、退之の兄の孫にあたる湘が大叔父の身を案じて、藍関まで伴れ添つて来たが、雪が深く進むことができない。彼は湘に向つて、「お前がここまで伴れ添つて来てくれた気持はまことに有難いが、もうこの辺で引き返すがいい。すでに帝の逆鱗に触れた儂は再び都に立ち戻ることはなく、辺疆に朽ち果てるであろう。その時は蕃地の川辺に俺の骨を拾いに来てくれよ」と、云い聞かせて、湘を長安に還らしめた。この詩はまことに清正公の風尚に叶つたものである」と、説明を試みた。

代官は目附役・兵頭に対して、韓退之の孤高の気概を示し、一矢を酬いるつもりだったが、無学文盲の彼等に何ほどのことが解つたろうか。おそらく、猫に小判、馬の耳に念仏であつたであろう。

振る舞い酒に酔い痴れた風顛共は打ち倒れて鼻提灯。李朝白磁の盃洗に虫が溺れ、木曾谷の夜は更けて、遠い森から仏法僧が聞えていた。

筋違

その後のある日、兵頭が親方を訪ねて来て、「山廻りの手伝いをせよ」と云うのである。彼は、親方が隠居して無駄飯を食つていずに、木の目効きの経験を生かして老後の御奉公をせよ、とすすめるのである。親方は老齢の身であり、とうていお役に立てないからと固辞したが、お上の命だから名目だけでいいということなので、不承不承これを承け、ふだん着に雪袴姿で毎日番所へ出仕していた。

俺は平素は木挽の仕事に精を出していたが、何か事あると親方の代理として引き出されて、当てがい扶持で兵頭の手下に使役されていた。

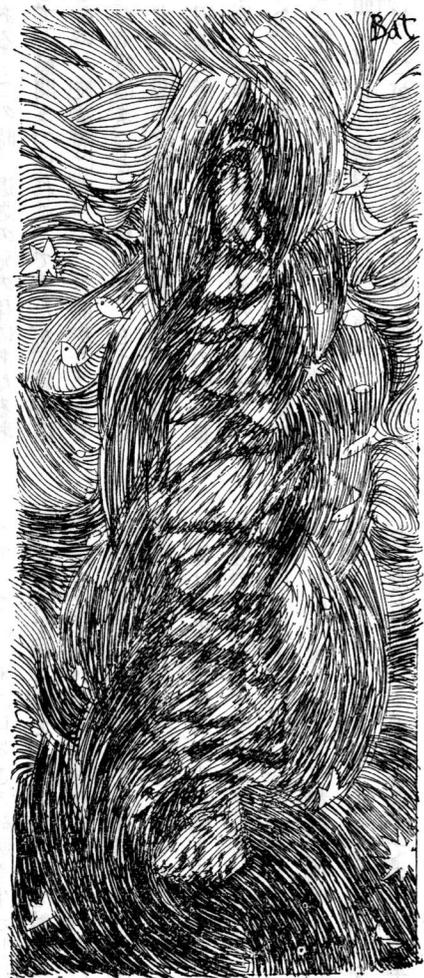
その年も秋となつて、黄櫨が色ずきはじめた頃、彼等にはわかにか色めき立ち、お上から千石の檜材を搬出せよとの命があつたと云つて、木曾谷きつての美林に手をつけようとするのである。この山は、枝下二丈、目通り二尺の大木が四、五百本北向きの谷を埋めずめていて、下草はシットリとした杉苔が人の足首を没するほどに厚かつた。

ある日、俺は番所に呼び出されて、親方侍立の前で兵頭から命令を受けた。その内容は、全山の立木を保存の甲木と伐採の乙木に区別せよ。甲木には目通りに繩三筋を巻き、乙木は無繩とし約千石を見積れ、というのであつた。

俺は荒繩の大束を担いで谷を上り下りしてこの作業をやつ

たが、木の鑑定に関して、素人山師の彼等生衆と屢々意見を異にし、口論にもなつたが、木性を見抜く俺の自信は彼等の言い分を少しもいれなかつた。併しながら、木を見ることだけを専一と心掛け、人間の筋違いを見分ける修業を怠つていた俺は、結果において彼等一党の罠に陥ち、かつがれて利用されたことになつてしまつた。

彼等は俺の扱ひだ無繩の乙木ばかりを伐ると思いきや、三本繩の甲木のうちでも甲上とされるものを数十本伐り倒してしまつた。俺は伐り出しの様子を見に来ていた兵頭に、「お武家さま、甲木を伐つてはいけましねえ」と忠言したところ、兵頭はいやに不機嫌になり、「余計なことに口出すな」と一喝し、なおも食い下る俺を杖でビシリと打ち、「そのままには捨て置けん」と、手下に命じて俺を荒繩で縛り上げ、引き立てて闇の木曾川に突き落とした。



木曾川の水で生ぶ湯をつかい、その水でこれまで生きてきた俺だから、暗い流れに身をまかせていても、淀みや早瀬の勝手は承知しているものの、着のみのままでもがんにがらめに縛られては動きがとれず、流されて、ついに寢覚床の渦に巻き込まれてしまつた。岩穴の中に首から採み込まれたかと思つと、足首が急に宙吊りの形となつて逆立つたまま奈落の深みに吸いこまれて行く。そのうちに平岩に乗せられて横転しながら滝壺

に落ち込み、沈むと思うとゆっくりと流されて行く。そんな間にも、俺はこんなことではまだ死にされるものではない、という感じが強く、死への安らぎが悟りきれずに、どこかに生きる光の道が通じて行くような気がしていた。そうしているうちに繩がゆるんだのであろうか、片手がスッポリ抜けた

ので、その手で片抜き手をきつて岸に這いつた。

九死に一生を得た俺は暫くの間、岩床に身を横たえ、夜色に身を預けていたが、そのうちに岩盤に響く瀬音が不思議にも俺の耳に、へ観音経・普門品の調べとなつて伝わって来るのであつた。

へ若し大水の為に漂わさるるも、其の名号を称せば、即ち浅き処を得ん

へ或は囚われて枷鎖に禁ぜられ、手足紐械せられんにも、彼の観音の力を念ずれば、釈然として解脱することを得ん

これらの句に続いて、五言の偈が立ち昇る川霧のように、次々と俺の脳裏に湧き立ち、それが大気の中に一つつつ吸い込まれて消えて行くと、次に瀬音が明けの梵鐘の響に変わつて、その中から思いよらぬへ心経が力強く、俺を揺り起すのである。

へ……心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、是大神呪、是大明呪、是无上呪、是无等々呪、能除一切苦、真实不虚……

夜がほのぼのと明けそめ、紅葉が音もなく舞い落ちて川瀬に流れ去るのを見て、俺は急に寒さを覚えだし、起き上つて着物を絞り、トボトボと福島親方の家さして歩いて行つた。

親方は俺を裏の毛見屋(納屋)にかくまい、おかみさんが着替へと熱い粥を差し入れてくれた。俺は土間に藁を敷いてその中にもぐり込んで、やがて深い眠りにおちて行つた。その

寢 覚 床

眠りの中で大廈高樓が紅蓮に包まれて、その焰の中から不動明王が現われて、火の雀を八方に撒きちらす夢を見た。俺はその絢爛たる莊嚴と、連打の半鐘に打ちひしがれて、目を醒ました時には、着替えた寝巻がグツシヨリと汗ばんでいるのに驚く次第だつた。

落 ち 鮎

兵頭一味は伐つた材を川におとし、そのうちでも甲上のものはかりを美濃中津に揚げて、売り捌いたのである。料亭・木曾川楼に時ならぬ灯が輝き、絃歌のさんざめきが三日三晩続いたという。三晩目の夜、彼等仲間の博奕のもつれから、諍が起り、やがて大乱闘となり、高樓に火が放たれた。炎々と燃えさかる火をくぐつて、煙の中から仲間の金を攫つて逃げた男がいた。その男はその足で福島の太官屋敷へ走り、一味の所業を代官に注進したのである。そんなことから事が暴れて、彼等一味は落ち鮎の群に投網が打たれたように、一網打尽に挙げられてしまつた。

この中津事件の余波を食らつて、福島の人々もざわめき立っていたが、俺の関わり知つたことではないので、俺は向う河岸の火事を見るつもりで、藁の中にもぐつてジツと事の成り行きを窺っていた。白昼堂々、役柄を利用してのこの度の官材の横流しは、彼等平素の言動から見て、天網快々粗にして漏らさず」という言葉や、へ因果応報」という言葉で一般

に取り沙汰されていたようだ。

これに反して一方、俺の親方は、「木性の鑑別の立場にありながら、故意に美材を伐らしたのは、情を知つてのことであろう」と、その筋から深い嫌疑をかけられて、一味と共に名古屋へ引き立てられていった。

その日

の夕方、
親方の家の濡れ縁に、五郎七分と筆書きのある金包みが置かれてあつた。これを見つけたおかみさんは、



狐につままれたうつろな目つきで、それを俺のところを持って来て、「こんな大金をどうしずいか」と云うのである。相談をかけられてみると、筆が兵頭の手であることから、俺もいささか不安になり躊躇したが、そのまま放り出しておくわけ

にもいかず、さりとして、返す目星もないこととて、とがめを受けている親方の葬式代にもと思つて、預かつて置くこととし、胴巻きに入れた。

徒党が潰滅してからも暫くの間、俺は毛見屋で寝起きしていたが、昼となく夜となく、鼠が「チュウチュウ」と鳴き廻る。このままじつとしていたのでは親方への忠義立てになりかねる。何を措いてもこの際、思いきつて代官の前に出て、親方の無実を申し開くに如かないと思つて、俺は立ち上った。

黄金の水

代官屋敷に参向した俺は、玄関の三和土に土下座して、新築の時に俺のこの手で挽き割った櫛の上櫃に手をかけ、親方の明かしの繰り返し繰り返し弁じた。代官は、今日に限って韓退之の剛毅木訥をサラリと忘れたかのように、「それにしても、大役を代理のお前に委かせて、昨日今日の役人衆に、木の誤りを犯させた五郎七の罪は重い。いずれお取り調べが済めば、黒白が明かになるであろう」と、恰も、さわらぬ神に祟りなしの云いまわしで取り合わないのである。俺はどうしてもあとへ退かず、ツイと奥へ引つ込む代官に、親方の無実を声を大にして訴え、俺を親方の身代りにしてくれとせがんだ。

そうしていると、五、六人の若衆が俺を門外に突き出し、つき出された俺が、石畳に胡坐を組んで居坐っていると、口

びて、頭から大小の黄金のゴタ汁をかけられた俺はこれから何処へ行けばいいのか、全く途方に暮れる次第だった。この糞尿が悪かつたせいとか、それ以来眼を病み続け、人の勧めるあらゆる療治を試みたが、効き目はなく、後になってとうとう失明の憂き目を見ることになってしまった。

丑の刻

俺の親方は、いつも木を挽きながら、延命十句観音経を唱えていた。

観世音、南無仏、与仏有因、与仏有縁、仏法僧縁、常樂我淨、朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心。このお経を十年間に百万遍も聞かされた俺は、門前の小僧習わぬ経を読むようになってしまった。

福島村はずれの櫛の森の中に観音堂がある。親方が引き立てられた晩から、俺はその堂に参籠して、このお経を繰り返えし唱えて、親方の無罪放免を祈った。

或る晩、時期はずれの生暖かい西風が枯れ葉を吹き寄せ、軒先の風鐸が音を立てる真夜中、勤行を終えた俺が、堂の戸を開いて、外へ片足を踏み出すと、その闇の中に、口を開いた女が立っているではないか。俺は、この時、頭の毛が総立ちになるのを覚えた。怖れで髪の毛が天を衝くという経験は生まれて此の方、この時が始めてだった。おぼろな月明りを背にした女の髪の毛が風に煽られて、ふわりとこつちに靡

々に、「この不義不忠者、よくも悪人共に力を貸しておつて、しやあしやあとしてけつかる！」と罵り、「泥猫失せろ！」と怒鳴つて、糞尿を俺の頭から浴せかけた。俺は黄金まぶしのぬた猫のような姿でその場を退き下つたが、手を下した男の中に、あの髯男の梅林藤四郎がいたことは実に意外であつた。髯はさっぱりと剃りおとしていて、それまでのような無頼の風体ではなかつたが、過日のあすなる問答の悪しみをここで一挙に晴らしてやろうという意気に燃えさかつていた。俺はこの男こそ、仲間を売つて代官に媚び、お美代に近ずいてこれを葉籠に収めようとして、数々の仕草を重ねて来た者に違いないと判断した。俺も予想外だったが、彼の方も、まさか木曾川の土左衛門が白昼堂々と現われるとは夢にも思つていなかったであらう。

むかしへ腰に十萬貫を纏つて、鶴に騎つて揚州へ行きたいという欲の皮のつっぱつた男がいたそうだが、腰に大金を帯

觀世音南無佛与佛有因與佛

有縁佛住僧縁常樂我淨朝念

觀世音暮念觀世音念々從心起

念々不離心

延命十句觀音經 宮田武義氏・筆

きかかる。俺は踏み出した足を咄嗟に引きつけて、戸をバチンと閉めた。女が悲鳴をあげながら走り去る気配に絵毛立った俺は始めて正気になり、動悸の高鳴るのを覚えるのであった。

この丑の刻参りの女は、残してあった下駄から、兵頭の一入娘のお鶴であることがわかったが、たとえ俺の仇かたきの相手柄とはいえ、若い身空で父の命乞いのために丑の刻参りを続けて、満願を果たさずに人に見られて、悲願が成就しなかったのは、事の偶然とはいいいながら可愛想なことをしたと思っている。

そんなことがあった日、兵頭一味のお仕置きの報らせが届いた。これでお鶴も断念したのだろう、それからは姿を現わさなくなった。俺は親方の首もすでに胴体から離れたものと思ひこみ、延命は断念し、次の晩からは、親方の成仏を念じて、専ら般若心経を誦誦した。

仏の路銀

三日月が西にかたぶき、鏢鉦の星が空にきらめきかけて、岳嵐に煽られる裸木が箒のように揺れて、この星屑を掃き落とそうとする寒い晩、俺はいつものように観音堂の戸を開けて、中に這入ろうとすると、そこに人が坐って居るではないか。思わぬ人影にギョツとした俺は、お恥しいことながら、この時も鳥肌立ち、髪の毛が総だつのを覚えた。その姿は正

一文受けとる訳にはいかぬ。お前が猫ばばして逃げてしまったことにするのがいい。これが仏の路銀というもの、有り難く頂いて置かつしやれよ」と、俺の手に突きもどし、手をしっかりと握りしめて、「江戸への道中、よくよく気を許すまいぞえ、さあ、チャット立たせえ」と、せき立てるのである。

俺もいよいよの瀬戸際に差しかけたことを感じ、金包を胴巻に取めて、取るものも取りあえず草履をつっかけた。そして、「川沿いの間道を伝わって藪原に出て、鳥井峠を登りきり、向うに下りれば、塩尻峠につながる道に出る。それを越すまでは、よくよく人の顔を見んように、な。藪原のおふくろにも会うまいぞえ」との親方の注意もそこそこに、夜気去りやらぬ村を抜け出て俺は間道に分け入った。

阿呆鳥

霜枯れた通草を取っては食いながら人目をさげ、藪原地籍にさしかかったのがその日の午後。檜林を抜け出ると風花が舞っていて鳥井峠は雪の模様。親方の言葉も心に残ってはいたが、おふくろの後ろ姿に一目をと、家の裏手へ廻り、戸の隙き間から覗くと、おふくろは俺の布子でも縫っているのか針に余念がない。囲炉裏の火に浮き出された影絵のような姿に足をうばわれた俺は、手を合わせる思いで、長いあいだ軒下に行んでいたが、やがて心を取り直し、軒端の干大根をふところ押し込み、かけてあった蓑笠と、ごんぞを抱きかかえ

しく向うむきの男の姿で、後頭の禿から幽かに光を放っている。逃げ出しそうになったが、平素から光頭の幽霊はいないと確信していた俺は、闇の中の一縷の光明によって、心もやや静まり、落ちつきを取り戻すことができた。禿の様子と、猫背の具合から、親方らしく感ぜられもしたのだが、低音で繰り返えし唱える十句観音経は他人の声ではない。名古屋で既首が飛んでいる筈の親方がどうして此処に坐っているのだろうか、いぶかしく思っていると、まぎれもない五郎七親方は誦経を区切って、こつちに向き直り、こんなことを云うのである。お前が毎晩この堂に籠って、自分の無罪を祈念していたことは、牢の中で観音さまが夢枕に立って知らせて下さった。吟味の末自分は、さいわいに無罪放免となり、きのう牢を出た。お上では、自分の身代わりに弟子、つまりお前を差し出せと云うのである。お前への捕り手が既に出されている。それに後れをとるまいぞと、日に夜をついで、寝ず休まずの旅を続け、やつとのことで、さつきこの森に辿りついた。さいわいに人目を避けて堂に忍び込むことができた。こうした巡り合わせもお互の念力が仏に通じたためであろう」と。そして、「しめし合わせてお前を逃がしたとなると、取り返しのつかぬことになる。夜が白む前に此処を抜け出て、人目をさけて江戸へと逃げのびろ」と、云うのである。

そこで俺はあれ以後の顛末をかいつまんで話し、胴巻きの金包を取り出して渡そうとすると、親方は、「そんな金はピタてその場を立ち去った。

鳥井峠にかかると、闇の中で囊まじりの風が笠を吹き上げて、首筋から舞い込む雪が背筋で溶けた。俺はごんぞに繩を巻きつけ、滑る雪坂を懸命に登りつめた。峠の頂上に出ると、雪はカラッとあがり、天界の闇がにわか拭かれて、燦し銀の紡錘を植え立てたような木立の谷が、まだ眠りから醒めぬ下界の村へとつながっていた。氷で固まった御岳、駒ヶ岳、乗鞍の山々の頭は、明けすめの薄陽に染まって、俺を見送るかのよう微笑んでいた。突然、頭上の樫の大木の枝から鳥が雪を蹴立てて飛び立ち、阿呆々と鳴きながら明けやらぬ谷へ舞い下りて行った。

鳥井峠の北谷から塩尻峠へ続く谷間には根雪になるほどの雪が積もっていて、ごんぞの丈が埋まるほどの深さもあつたが、雪道を歩くことには馴れている筈の俺が、ひどい目脂に悩まされて、道を踏み外しては雪溜りに落ち込んだ。

諏訪の寒蛭が眼にいいとか、八ヶ岳山麓の延命水が万病に効いて眼には請け合いだとか、または、大菩薩峠の水で眼を洗えば首も開眼するとか、行きずりの人達からさまざまな勧めを聞いて江戸へ辿りついた旅鳥の俺は、寛永初年の暮に、にわかに明るさを失って盲となつてしまった。

遍路歷程

勝手しらない大江戸の、八百八丁の裏路を、杖一筋を頼りに